

(2540 m, 1952, VIII, No. 12541). 中央アルプス; 木曾駒ヶ岳 (2900 m, 1951, VIII, No. 12781, 清水剛治). 加賀: 白山 (2400 m, 1950, VII, No. 9357). 越後: 焼山 (2400 m, 1950, VII, No. 13080, 矢野孝二).

分布. ヨーロッパ, グリーンランド, アラスカ.

この機会に、中部日本山岳地域の薔類調査に際して終始御世話をお願いしている松本市博物館の下川頼人氏に深甚の感謝を捧げる次第です。 (續く)

### ○ニガキ (原寛) Hiroshi HARA: *Picrasma quassioides* of Japan.

ニガキはヒマラヤ産の *Picrasma quassioides* (D. Don) Bennet と同一とされたり、或は日本や支那のものは別種として *P. ailanthoides* (Bunge) Planchon として扱われたりしている。分布が廣いので、殊に毛の程度に關して可成りの變化が見られる。ヒマラヤのものは葉下面特に脈上に帯褐色の毛が多く葉軸にも毛が多い。しかし他の重要な性質では日本産に一致し、葉形・雌雄花の構造にも差異が認められない。日本、朝鮮のニガキは若葉の時は下面葉脈上に毛を疎生するが後殆ど無毛になる。もつともニガキでもこの毛がやや多くなるものも見られ、又子房は無毛が普通であるが時に少數の毛を散生するものもある。花の大きさ、花糸の毛にも多少の變化がある。支那にはニガキと全く一致する形が四川や湖北省にあるが、又やや毛が多くヒマラヤ産との中間を示すものがある。臺灣のものは子房に毛が多いが、葉は殆ど無毛である。又南滿州から書かれたケニガキは葉下面に毛多く子房に密毛を有する形でヒマラヤ産に近づく。この様な變化を考慮にいれ、これらをすべて同一種 *Picrasma quassioides* として扱いたい。この種の分布は、西はカシミル南部からヒマラヤ山地を経て雲南、四川に至り、南は香港、臺灣から北は山西、河北、滿州南部に達し、東は朝鮮から北海道中部以南の日本全域に及んでいる。ニガキをこの分布區域の東方を占める毛の少い地方變種と考えて、毛の少い極端形につけられた var. *glabrescens* Pampanini (1911) の學名を起用するのが妥當と思う。

なおニガキの果實は成熟すると緑藍色といった色になる。しかるに Rehder は Man. ed. 2 (1940) や Bailey, Stand. Cycl. で果實は鮮紅色とし、支那でも Chun, Chin. Econ. Tr. (1921) や Chow, Fam. Tr. Hopei (1934) は同様に書いている。しかしこれらは恐らく Sargent が For. Fl. Jap. (1893) でニガキの果實は 'bright red and handsome in September' と述べているのに基づいたものと思われるが、これは彼の誤認によるものである。陳は中國樹木分類學 (1937) で藍綠色としている。印度産については Brandis (1906) 以來 Collet (1921) や Kanjlal, Das & Purkayastha (1936) も黒色と記しているがこれも生品について確めたものか疑わしい。